

今あるものづくりを その先の未来へ

e 建具

T A T E G U

2012

9月号



低炭素住宅の評価方法

福祉施設で進むユニット化

大手建材メーカー各社が オーダー品UDドアを市場投入

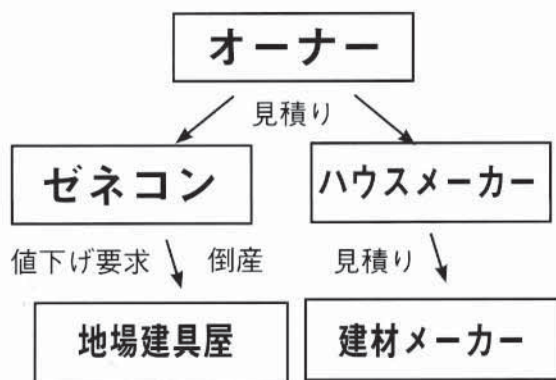


積水ハウスのサービス付き高齢者向け住宅

地場建具業界は、大手建材メーカーの海外生産ユニット建具の普及により、価格競争に負け、市場淘汰され、倒産が相次ぎ、地元の木工所では建具を作るチャンスも失われ、後継者すらいないう状況となっていました。この状況にいよいよ最後の弔鐘が鳴らされようとしている。公共向け建具屋にとって最後の領域とも言える施設の特注ドアのユニット化の動きである。

昨年の夏から大手建材メーカーによる特注ユニバーサルドアの商品開発が顕著に見られるようになってき

た。新商品の動きを追ってみると、この会社でも施設向けのユニバーサルドアを高付加価値商品として展示会のブースで大きく展示している。パリアフリー新法（2006年末施行）から5年以上経つのに、なぜ今さらと思うかもしれない。その背景にあるのは、近年、ハウスメーカーが、サービス付き高齢者住宅の開発を非常に積極的になってきたことがある。これに追うように建材メーカーが開発に力を入れているのだ。今年の9月には積水ハウスが、賃貸住宅に生活支援サービス機能を組



施設向け建具流通の見取図

み合わせ、高齢者が安心して暮らせる住環境を整えたサービス付き高齢者向け住宅（以下、「サ高住」）の新商品「CELEBLIO（セレブリオ）」を9月10日に発売。サービス付き高齢者向け住宅専用住宅商品の発売は業界で初めとなる。

75歳以上の高齢者は団塊の世代が70代を迎える平成37（2025）年までに、現在のおよそ1・5倍の2000万人を超えると予想されている。高齢化が急速に進む中で高齢の単身者や夫婦のみの世帯が増加しており、医療・介護と連携して高齢者を支援するサービスを提供する住宅を確保することが極めて重要となっている。その一方で、当該サービス付きの住宅の供給は欧米各国に比べて遅れており、このため、高齢者の居住の安定を確保することを目的として、政府も平成32（2020）年を目途にサービス付き高齢者向け住宅を現在の10倍の60万戸にまで拡充する方針を打ち出している。

こうした動きに対して建具金具メーカーも続々と新商品を発売しているが、ゼネコンを取引先とする建具屋は一段と厳しい価格攻勢を迫られることになるのは必至だろう。

青年海外協力隊としてアフリカ・ニジェールで木工の職業訓練

自立を促す木工技術と支援対象国の課題

(有)日健建具製販所の大野高裕さんは平成20年から2年間に渡って青年海外協力隊の一員としてアフリカ北部のニジェール共和国に派遣された。現地では子供達の職業訓練として木工を教え、日本の木工技術を伝えた。現地での授業の苦労や工夫、アフリカの地における木工業界の実情などについて大野さんに話を聞いた。

最貧国で教える木工

まず、ニジェール共和国の概要について触れておく。ニジェール共和



ニジェールでの経験を語る大野さん

国はアフリカ大陸北部の砂漠地帯にあり、外務省の資料によると面積126万7000平方km、人口1529万人。首都のニアメ市には67万5000人が住んでいる。言語はフランス語が公用語であり、他には現地語のハウサ語とザルア語が使われている。宗教は国民の大多数(9割以上)がイスラム教を信仰。民族はハウサ族の他に5〜6の民族が国内に暮らしている。

ニジェールは昭和30年代にフランスから独立した新興国家だが、産業はウラン・鉱石の採掘と農牧業が中心。しかし、産業の多角化は進まず、現在も世界最貧国の一つであり、初等教育及び中等教育とも普及していない。このような状況下、大野さんは国際協力機構(JICA)の青年海外協力隊としてニジェールの首都にある職業訓練校で木工を教えた。派遣当初の様子を大野さんは次ぎのように振り返った。

資材・工具の乏しい中で

った。そのため、赴任したのは平成21年の3月になってからだだった。

派遣先の「セントラル・エデュケーション・ミューゼ・ナショナル」は国立の職業訓練校。木工、鉄ドア、水道管工事、パソコンの入力、自動車整備、家政・裁縫などの実技研修のコースを学科としている。教育期間は3年。生徒数は全体で300人から400人。木工の全クラス合計で100人規模となる。基本的に受講料を支払えば入学可能であり、遠方から通う生徒もいた。

「ニジェールは貧しい国で仕事がない。そこを改善するために青年海外協力隊がいる訳ですが、自分は木工分野の講師として初等・中等教育の職業訓練の一環で現地の職業訓練校で教えました。生徒には初等教育を受けていない人も多く、公用語はフランス語ですが、現地語の方が話しやすいという生徒も少なくありません。言葉の壁は同僚の現地人の講師からサポートを受けながら、何と講義を進めました」

派遣に当たり、大野さんはフランス語などを日本で2カ月間訓練してから翌年の1月にニジェールへ出発。到着後、郊外で現地語を訓練し、その後正式に訓練校の講師とな

訓練校には昇降盤や同軸の加工機などの電動工具もあった。また、手道具は欧州式の鋸や鉋、スコヤなども少ないながらも揃っていた。これは以前、ドイツのボランティアが訓練校に指導者として入っていた際、工作機械や手道具を置いていったくれたものだ。ただ、予算が少ないために道具や機械のメンテナンスができず、加えて道具の絶対数に対して生徒の人数のバランスが悪く、効率良く教えることはできなかったと大野さんは回顧する。